

今年9月初旬、何年か振りに伊勢神宮に参拝した。伊勢神宮は北海道神宮や熱田神宮などと異なり、その正式名称は地名が付かない唯一の「神宮」であり、ここには三種の神器のうち八咫鏡（やたのかがみ）が祀られている。外宮、内宮の順に参拝したが、小砂利が敷き詰められた参道を歩きながら、明治維新前後の神道国教化政策に思いを馳せてみた。

明治維新というものは多くの欺瞞や矛盾を抱えていたと思う。尊皇攘夷思想を旗印に維新を進めて

はみたものの、明治政府に「攘夷」を行う考えなど毛頭なく、外国と発展的に交際する必然性をすぐ目の前に見据えていたと思う。幕末に数多くの志士が尊皇攘夷を叫び勤王の志士として命を落としていく中で、「攘夷」などという考えが倒幕のための1つのイデオロギーに過ぎなかったことは、戊辰戦争開戦直後に起きた神戸事件を紐解けば明らかとなる。

さて、明治政府の基盤は脆弱であった。そのような脆弱な基盤の下、外国と積極的に関わっていけば、我が国にキリスト教が進出してくることも避けられない事態と

予想していたはず。しかし、その対策の1つとして、神道国教化政策が採用され、その下準備として明治政府が神仏習合の慣習を禁止。神道と仏教とを明確に区別させることを内容とする神仏分離令を出し、これに併せて皇祖皇統とそれに仕えて功績のあった者を神として祀るといふ国体神学の原理の下に、仏教寺院や仏像、仏具などを民衆などが破壊することを半ば放置したことは大きな誤りであったと思う。

有名な話であるが、現在は国宝に指定されている興福寺の五重塔は売りに出され、薪にされる寸前であった。さらに耳なし芳一が住んでいたとされる阿弥陀寺も廃されてしまうという事態となり、神宮のある三重県では激しい廃仏毀釈のため、全国平均に較べて古い建物の数が少ないと言われている。

神道国教化政策も神仏分離令も廃仏毀釈の動きも欺瞞や矛盾に満ちている。歴史を振り返れば、大和朝廷自体が伝来した仏教を多少の紆余曲折はあったものの受容し、経典などからさまざまに文化を吸収して日本独自の文

化に発展していったことは紛れもない事実だ。さらに、平安時代以来、天皇家では、菩提寺である泉涌寺で仏式の葬儀が行われていたことも明らかである。このような歴史的事実を踏まえると、皇祖皇統とそれに仕えて功績のあった者のみを神として祀り、かかる神から分離された仏教を排斥するという考え方が、長きに亘る日本の歴史から見れば異質であることは明らかではないか。しかし、明治政府は天皇家を中心とする新たな国家に対する国民的忠誠心を作り上げるためのイデオロギーとして神道国教化政策、それに基づく神仏分離などの施策を実行していったのである。

ところで、今まで述べてきた外的を撃退するという意味での「攘夷」も、皇祖皇統とそれに仕えて功績のあった者のみを神として祀ることを前提とする神道国教化政策や神仏分離令、廃仏毀釈の動きも、その概念自体は純化された考え方である。しかし、それを国家として実行していくならば、さまざまに危険を孕む内容が含まれているのではないか。その概念自体が純化されているがゆえに論理明快であ

り、言葉としても耳に心地よく、また、容易に民衆を結束させていくエネルギーを内包するような概念が出てくる危険性は常にある。注意深く見ていくと危険な考え方を孕んでいるものや、内容が極めて空虚で欺瞞に満ちたものが散見されることは、現代に生きる私たちが気にしておかなければならないことではないかと考える。

昨今、短いフレーズで物事を把握しようとする結果、モノクロで物事を考えがち傾向が社会の中に根強くなっていることは否定できない。とするならば、雰囲気とか感覚的なことで国家の大切なことが決められる風潮は何とか避けなければならぬ。「原発ゼロ社会」という概念についても、賛成が反対に関わらず、その内容を注意深く見ていかなければならない純化された概念ではないかと個人的には考えている。

短いフレーズで物事を斟酌する風潮が社会に蔓延すれば、大切なことの多くが削ぎ落とされてしまう。短いフレーズで語られる物事以外の側面が常にあること、その側面の内実が何であるのかを思考することを停止してはいけない。

純化された概念の危険性について

律談 ⑪

法相 尺

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。